

<p>絵画Ⅱ</p>	<p>報告課題第2回 解説</p>	<p>年 組 氏名</p>
------------	-------------------	---------------

ポール・セザンヌ 解説

近代絵画の父と呼ばれるセザンヌについて学んでいきましょう。

●ポールセザンヌ

ポール・セザンヌは、フランス生まれの画家です。画家になってパリに住みたいという思いを持って、パリで絵の修行、疲れて故郷に戻るを繰り返しながら生活したそうです。

セザンヌの絵画より少し前に遡ると、目の前の光景をリアルに描こうとした写実主義、印象や光の表現に重点を置いた印象派があります。セザンヌ自身も印象派ではありますが、印象派では物の形が不明確になるのが納得できず、故郷に帰って自分の絵画を追求します。

そしてセザンヌは、「画を描くことは構成すること」と考え構成を重視しました。自然の中に幾何学を見つけ出し、それを表現しようと追求しました。特にセザンヌが得意とした絵画は静物画で、独特の手法を取り入れています。

後に多くの画家に影響を与え、「近代絵画の父」とよばれています。



厳しい父の教えに従い、法学部に入学したけれど、やっぱり絵が描きたくて、パリで絵の修行をした。何度もサロン(展覧会)に落選し、故郷に帰ったけれど、粘り強く自分の世界を描き続けたんだ。故郷に帰ってサント・ビクトワール山をモチーフに何枚も作品を描いたんだ。



「果物籠のある静物」
オルセー美術館
1888-90



「りんごとオレンジ」
オルセー美術館
1899

砂糖壺が傾いていたり、壺が上から覗き込んでいるように描かれていたり、果物籠が横から見たように描かれていたり、テーブルの左右の稜線が食い違っていたりといった、多くのデフォルメが生じています。一つ一つのリンゴの色も色彩バランスを考えて塗られています。

りんごはセザンヌの静物画によく描かれたモチーフだ。



「サント・ヴィクトワール山」
フィラデルフィア美術館
1904

セザンヌは晩年、「自然にならって絵を描くことは、対象を模写することではない、いくつかの感覚を実現させることだ」と述べていました。

自然を一瞬一瞬の変化の連続ではなく、永続的で普遍に見たセザンヌは自然の構造を分析して本質を理解することに興味を持つようになります。そのため、見たままの姿ではなく、形や空間に新しい視点を投げかけ、構築された絵画を追求しました。